

問題・解答
用紙番号

9

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、外国語学部、経済学部、経営学部、
看護学部、農学部【文系科目型】

問題は100点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部と同じ漢字を含むものを、ア～オのうちからそれぞれ一つ選びなさい。
(10点)

1 イセイ者としての責任を問われる

ア 日々をムイに過ごす

イ 主人公に感情をイニユウする

ウ 明治イシンについて学ぶ

エ 事件のケイイを説明する

オ 全権をイニンする

2 キンミツに連絡を取り合う

ア 彼はキンゲン実直な人だ

イ 心のキンセンに触れる

ウ キンサで競り勝った

エ キンダン症状を引き起こす

オ キッキンの課題に向き合う

3 些さい細さいなことにコウコウデデイする

ア 判決に不服でコウコウソソする

イ コウコウチチヨヨククした考え方を捨てる

ウ コウコウソソクク時時間間が長すぎる

エ コウコウジジョョウウ的的な問題を抱えている

オ 状況をコウコウテテイイ的的に考える

4 優勝のエイエイカンカンに輝く

ア 教室の窓を開けてカンカンキキする

イ 皆で楽しくカンカンダンダンする

ウ 国会に証人をカンカンモンモンする

エ 洪水で道路がカンカンスイスイする

オ 人混みのカンカンゲゲキキを縫って進む

5 奈良のメイメイセセキキを巡礼する

ア 大学をシュシュセセキキで卒業する

イ 目にセセキキベベツツの涙が光った

ウ セセキキジジツツを懐かしむ

エ キキセセキキ的的に一命を取り留める

オ デデーータタを詳しくカイカイセセキキする

II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

フランスの博物学者ビュフォン(一七〇七～八八)は、自然界において、人間を、話す能力と思考する能力によって他の動物とは異なる存在であるとした。白人ヨーロッパを素型とし、ある気候の土地から別の気候の土地へと移動する、何万年という歳月によって人間の多様化が起こったと考えた。

^A ドイツの哲学者カント(一七二四～一八〇四)も、啓蒙期におけるアンソロポロジーの発展に大きく寄与した。彼はアンソロポロジーの講義を三〇年近く続け、その記録は『人間の実用的見地について』におさめられている。彼はそこで人間の内面性に関する哲学的・倫理的な考察はもとより、民族や人種についての自然人類学的な考察もおこなっている。さらに、彼のペンからは、「さまざまな人種について」(一七七五年)、「人種概念の規定」(一七八五年)といった論考が生まれ、『自然地理学』の講義では、博物学的観点から、人間の顔立ちや性格、髪や肌の色、気候や風土、混血に関する分析がなされている。カントがバルト海沿岸の都市ケーニヒスベルクからほとんどでたことがなかったというのは有名な話だが、そのようなカントが書齋にいながら世界のさまざまな民族に関して思いをめぐらすことができたのも、旅行家たちがもたらした膨大な量の「学術的」資料のおかげである。

近年の科学史家たちによる評価では、カントは近代における「人種」という概念の定義を確立させた人物の一人と位置づけられている。しかし、カント研究者たちは、彼の「人種」に関する議論に向き合うことを厭^{いと}う傾向にある。いや、カント研究者に限らず、今日の十八世紀研究者たちの多くが、啓蒙期の「人種」というテーマを避けてきた印象すら受ける。しかし、地球上のすべての人間を分類し、把握しようとする遠大なプロジェクトは、理性を信奉する「啓蒙の世紀」ゆえに企てられたものである。とりわけ一七七〇年代、いわゆる啓蒙主義の後期とされる時期から、世界の人間を区分する知的営みが、いつそう緻密かつ入念なたちで科学の新しい領域を形成していった。

「科学的な」人種概念は、十七世紀末のベルニエ(一六二〇～八八)の論考に端緒を見出すことができる。彼は、地球上の人間を四つの集団に区分した。①ヨーロッパ人・モロッコやアルジェリアなどアフリカ人の一部・ペルシア人・ムガル人など、②アフリカ人、③フィリピン人・日本人・中国人・タタール人・ウズベク人など、④ラップランド人(サーミ)である。キリスト教徒か異教徒かという宗教上の二分化でなく、肌・体格・顔・鼻・目・唇・ひげ・髪などの色かたちを基準として分類を試みており、啓蒙期の人類学の 1 となった。

十八世紀にはいり、「アダムとイヴの子孫である」人間をチンパンジーやオランウータンといった類人猿と並べて分類したリンネ(一七〇七～七八)の著作は、センセーショナルに受け止められた。そして、このころから「人種」^Bをめぐる議論がさかんに戦わされるようになった。黒人もヨー

ロッパ人もアメリカ先住民も、同じ「人類」に属す。では、肌の色や体格の違いといった相違はどのように生じるのか。そしてこの身体的相違は、それぞれの「人種」の精神的・性格的な特徴とどのように関係しているのか。そもそもすべての「人種」は同じ起源をもつのか、それとも複数の起源に由来するのか。こうした問いが投げかけられ、数々の学術旅行が企画されるのにもなつて、多くの自然研究者たちが人間の分類を試みた。

そのなかで、ブルーメンバッハ（一七五二―一八四〇）は、肌の色や髪質など表面に見えるものばかりでなく、肌の下にあるもの、とりわけ骨格に着目した。彼は頭蓋骨の形態を重視し、体格や肌の色も考慮して、人間の種を「コーカサス」「モンゴル」「エチオピア」「アメリカ」「マレー」の五つに分類した。「コーカサス人種」とは、コーカサス（カフカース）山脈からつけられた彼の造語であり、この地域に最初の人間が出現し、白い肌をもつ「もつとも美しい人間」が住んでいるとされた。

ブルーメンバッハは、「人類の真の色」である白い肌をもった「コーカサス」を中心に、もっともかけ離れた二極点に「モンゴル」と「エチオピア」を位置づけ、それぞれの間段階に「アメリカ」と「マレー」をすえた。彼のこの図式に、「人種」間のヒエラルキーが包含されていることは否めない。彼の研究には、身体的特徴から美醜の価値が付与され、さらには、知性や道徳性の尺度までをあらわす危険性がひそんでいた。これは当時、一世を風靡したスイスの啓蒙知識人ラーフター（一七四一―一八〇一）による観相学の考えとかさなっている。観相学とは、顔のかたちや顔の表情から人間の性格や知能、道徳的素質を読み取るうとする「科学」で、例えば、厚い唇は洗練や優雅といったものからはほど遠く、他方、突き出た額は冷静で勤勉な性格を示すといった具合であった。同じくウィーンで活躍したガル（一七五八―一八二八）の骨相学も、頭蓋骨に着目し、その凹凸を視診、触診すれば、その人の気質や能力の発達などがわかるとした。

^C 奴隷制の是非をめぐる、黒人たちの身体的特徴から性格や労働の適性などが議論され、そこにはこうした人種差別的な表現も少なくなかった。デイドロとダランベールらが編集した『百科全書』の「ニグロ」の項目を例にあげてみたい。

彼らは、皮膚の色によって区別されるだけでなく、その顔のあらゆる特徴、例えば大きく平らな鼻、厚い唇、縮れ毛によってもほかの人間と異なっており、人類の新しい独立した種を構成しているようにみえる。赤道から南極に向かうとき、肌の黒色は薄くなっていくが、その醜さはそのままである。……ギニアのニグロのなかで偶然に正直な人びとに会うことがあったとしても、大多数は放縦、復讐心が強く、盗みや嘘は平気である。彼らの強情さは、罰を与えても決して過ちを認めないほどである。死に対する恐怖さえも彼らの心を動かさない。

黒人の身体的特徴を示すだけにとどまらず、醜いという 2 な形容詞が加えられ、性格のステレオタイプ化もなされ、奴隷への残忍な仕打ちもやむをえないといわんばかりの記述である。

奴隷制に対するこのような危うい議論は、比較解剖学の研究でも展開されていた。『黒人と白人の身体的差異について』という著作を発表したゼンマリリング（一七五五―一八三〇）は、ドイツに連れてこられた黒人の身体を調べ、各部位の形状を入念に観察した。ゼンマリリング個人は、黒人と白人の身体的差異を純粹に探究しようとしたのだろうが、この「純粹さ」の影には、西洋近代科学がもつヨーロッパ中心主義が見え隠れしている。彼は、肌の色はヒエラルキー的な差異をつくらな
いとし、「黒人は、われわれと同じように真の人間である」と強調しているにもかかわらず、「人類という生き物の王位にあって、かなり低い段階」にあると明記している。

当時の議論には、マンチェスターの医師ホワイト（一七二八―一八一三）のように、あからさまに黒人の醜さや劣等性を主張し、はては黒人と猿の類似性をまことしやかに論ずる声も聞かれた。ブルーメンバッハやゼンマリリングといった著名な医学者が、たとえ奴隷制に反対し、「黒人も彼らが生きる気候風土のなかではヨーロッパ人よりも完璧な創造物だ」と唱えても、彼らの分類には価値の優劣をとめない、結局は白人ヨーロッパの優越性を示す根拠として利用されていたのである。ブルーメンバッハらの名前と功績は、十九世紀後半の人種主義論を代表するゴビノーの著作や二十世紀前半のナチズムの「人種学」のなかでも言及されている。「啓蒙の世紀」に「科学的な」人種概念が登場した点は、強調されるべきであろう。現在、「人種学」の似^え非^せ科学性は暴露され、「人種」カテゴリは生物学的に破綻したとされているが、人間が「理性」の名で何を生み出してきたのかを歴史に問い続けることは重要であろう。

「啓蒙の世紀」の科学の光は、「人種」間の差異を照らし出したばかりではない。カントが人間の内面を考察するために、民族や「人種」と並んで男女両性の差異について論じたように、^D性差も、人間学・人類学において欠かすことのできない対象であった。

現代の科学史家トマス・ラカーによると、十八世紀末までの西欧世界は、古代ギリシア医学を集めたガレノスの影響を脈々と受け継ぎ、男女の差異はあくまで相対的に認識されていた。男女の性器はもともと一種類の基本形をもち、構造的には同じでむしろ程度に違いがあるにすぎない、というワンセックス・モデルが支配的であったという。この相対的性差の認識においては、「外に出るべきものが内側に引っ込んである」などと考えられ、実際、古い解剖図をみると男性性器と女性性器がたんに裏返しになって描かれている。これに対して、十七世紀末に顕微鏡を用いてマイクロなレベルで生殖のメカニズムが意識されるようになるなど、徐々に男女の身体における絶対的な差異が強調されるようになった。このようなツーセックス・モデルは、一七七〇年代以降、医学、とりわけ比較解剖学の取組みによって定着していった。

「人種」の差異についての観察と同じように、性差の探究は、性器や胸の膨らみといった外部にあらわれる性徴だけではなく、神経、筋肉、骨格など「皮膚の下」にまでおよんだ。前述の比較解剖学者ゼンマリリングは、身体全体の基盤ともいえる骨格に性差を認めることができれば、ほかの身

体部分の性差も説明されうると考えた。彼は、子どもを一人産んだことのある二十歳の女性の骸骨を取り寄せ、非常に精密な女性の骨格図を発表した。

ラカーと同じくジェンダーの視点から当時の知を考察する科学史家L・シービンガーによると、十七世紀までは骨格図に性別がかならずしも考慮されておらず、女性の骨格図が描かれ始めたのは、ようやく十八世紀になってからだという。フランスのダルコンヴィル（一七二〇～一八〇五）は、女性の骨盤を広く頭蓋骨を小さく描き、女性の特徴を誇張したために、ゼンマリングの骨格図よりも好評を博した。骨盤と頭蓋骨の大きさが、「出産をする性」と「理知的な性」を象徴し、当時の理想的な女性像、男性像を描き分けていると評価されたのであろう。

ゼンマリングの弟子であるアッカーマンは、『性器以外の男女の身体的差異について』（一七八八年）でつぎのように述べている。「一瞥^{いちべつ}してすぐに、男の骨格は、女の骨格と区別される。女の骨格は、男よりも洗練されており、男ほど頑強ではない。骨の結合すら、女性の明確な特徴を示しているように思われる」。さらに彼によると、女性の体は、「あらゆる部分で最高に美しく、女らしくつくられている」とし、例えば女の手は、「このうえなく洗練されており」、「体の一部にすぎないにもかかわらず、それだけで女の美しさ全体をあらわしている」という。

概して、^E男女の身体に関する議論には一つの傾向が見出される。身体的特徴をあらわす形容詞を取り出してみると、男の身体は「大きい」「強い」「がっしりとした」などが、女の身体は「小さい」「弱い」「きゃしゃ」などが頻繁に用いられている。男女は、身体的にまったく異なるばかりではなく、対極するものとしてとらえられているのである。こうした身体的特徴の観察は、男女の性格のステレオタイプ化を進め、男は「自立的」「活動的」「理性的」「勇敢」であり、女は「依存的」「受動的」「感情的」であることが自然になつていくと説かれるようになる。対極する心身をもつた男女は、ゆえに相互補完し合いながら夫婦として結ばれ、家庭生活をいとなむことになるのである。

性差についてのこのような議論が活発になったのは、伝統的な身分制社会がゆらぎ始め、新しい社会の秩序が構想された時期である。フランス革命期には、女性に人権を与え、教育や職業の自由を保障すべきであるという女性解放思想が唱えられたが、その一方で、女性とは出産する性、弱き性、美しき性であるとして、父や夫の保護下で家庭という領域にとどまるべきだとする「市民社会」の倫理が強まっていく。十八世紀後半以降、多くの啓蒙知識人たちによって議論された「強く」「たくましい」「立派な」市民男性と「良き妻・母・主婦」という理想像は、右のような比較解剖学の「科学的な」根拠をもって女性解放思想の声を抑え込むことに成功したのである。

科学もまた社会的・時代的産物である。ラカーは、ワンセックス・モデルからツーセックス・モデルへの移行は、「科学において変化が起こったためにできたのではなく、むしろ認識論の変化、社会・政治の革命の変換の結果生じた」と述べている。身分制秩序がフランス革命によって解体さ

れると、「男」とか「女」といったカテゴリーが今まで以上に前面にあらわれ、新しい時代のジェンダー秩序が打ち出されていった。性差の「科学的」探究もまた、女性の権利を認めなかった近代のイデオロギーの 3 ののである。

ひるがえって、先にみた「人種」をめぐる「科学的」探究も同じであった。たとえ比較解剖学者本人が人種差別反対を表明しても、彼らの考察は奴隷制擁護や植民地政策のレトリックに用いられ、そのイデオロギーを支えたのである。男女の差異、「人種」の差異に科学の光を投じたのは、もっぱら白人ヨーロッパの男性知識人たちであった。彼らの信奉した「科学」^Fは、その深層において、女性や世界のさまざまな民族を「他者」として対象化し、自由や平等という枠組みからはじき出していく論拠を提供したのである。

〔弓削尚子『啓蒙の世紀と文明観』、一部改変〕

*アンソロポロジー…人間学・人類学。

問一 空欄 1 3 に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|---|-----|---|---|--------|
| 1 | ア | 軌跡 | 2 | ア | 一義的 | 3 | ア | 一翼を担った |
| | イ | 指標 | | イ | 画一的 | | イ | 牙城を崩した |
| | ウ | 精髓 | | ウ | 客観的 | | ウ | 後塵を拝した |
| | エ | 布石 | | エ | 主観的 | | エ | 矛盾を突いた |

問二 傍線部A「ドイツの哲学者カント」とあるが、カントの話題はこの文章においてどのような役割を果たしているか。次のア～オのうちから最も適切なものを選びなさい。

- ア カントが他の研究者よりも幅広い観点から多数の著作を残していることを具体的に示し、その偉大さを顕揚する役割。
- イ 書齋にいながらでも世界中の民族に関して考察を巡らせられるほど、世界の学術的資料がヨーロッパに集まっていたことを示す役割。
- ウ 近代における「人種」の概念を確立した重要な人物を紹介しておくことで、その後につながる研究者を紹介しやすくする役割。
- エ 哲学者で知られるカントが「人種」に深い関心を持っていたことから、十八世紀における「人種」というテーマが持つ重要性を喚起する役割。
- オ カントの「人種」に関する議論に向き合わない研究者がいることを批判し、筆者がそれに向き合うことを宣言する役割。

問三 傍線部B「人種」をめぐる議論」とあるが、当時の「人種」をめぐる動向について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 身体的特徴と精神的特徴の関係を明らかにすることで、「人種」の分類が可能になるとされた。

イ 人間をキリスト教徒と異教徒に二分するために、肌の色や体格による「人種」の分類が活用された。

ウ 人間を身体的特徴によって「人種」に分類する際に、美しさの基準が持ち込まれることとなった。

エ 観相学や骨相学の成果を活用して、骨格からその「人種」の性格や能力を読み取るようになった。

オ 膨大な学術的資料により、いずれの「人種」も類人猿との間に実質的な差はないと主張された。

問四 傍線部C「奴隷制の是非」とあるが、当時の奴隷制をめぐる動向について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 黒人を奴隷とすることを正当化するために、黒人の身体を入念に調査すべきとされた。

イ 黒人と白人の身体的特徴が探求された結果、価値の優劣が付けられることとなった。

ウ 奴隷制に反対して黒人の優位性を唱える研究者の調査結果は、無視されることとなった。

エ 奴隷制を深く反省することもないままに、「人種」カテゴリーは破綻したと主張された。

オ 白人の優越性を強調するために、何ら調査もなく黒人は身体的に劣っているとされた。

問五 傍線部D「性差も、人間学・人類学において欠かすことのできない対象であった」とあるが、当時の性差をめぐる社会の動向について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 男女の差異は相対的なものであるとするワンセックス・モデルは、次第に科学者から批判を受けるようになった。

イ 比較解剖学の進展により、男女の身体には絶対的な違いがあるとするツーセックス・モデルが定着していった。

ウ 骨盤や頭蓋骨に性差を認めることができたため、男女の役割がより明確化されることになった。

エ 男女の外部にあらわれる特徴を精密に測定することで、骨格にも性差があると考えられるようになった。

オ 骨格図にまで女性の特徴を大きさに表現することで、理想的な女性像を反映させようとした。

問六 傍線部E「男女の身体に関する議論」とあるが、当時の男女の身体観について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 女性の身体の描かれ方には、「良き妻・母・主婦」でありたいと願う当時の女性の理想が表されていた。

イ 女性の骨格が男性よりも洗練され美しいとされることは、女性解放思想を後押しすることとなった。

ウ 女性の身体が小さく描かれることは、女性は男性に保護されて家庭生活を営むべきであるという倫理を支えることとなった。

エ 男女は対極する心身を持ち相互補完するものだという考えは、身分制秩序を解体し新しいジェンダー秩序を生みだした。

オ 男女の身体的特徴により、男は自立的で女は依存적であるといったそれぞれの性格の違いも説明できると考えられた。

問七 傍線部F「彼らの信奉した「科学」」によってもたらされたことは何か。次のア～オのうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 骨格の違いなどの科学的調査に基づくものとして、白人男性の優位性を人々に認めさせる根拠を与えること。

イ 科学により理性を尊重する考えが広まることで、女性やヨーロッパ以外の民族を感情的であると見下すこと。

ウ 性差や人種の差異が科学的に明らかになり、白人男性以外の人々を他者として排除するための制度が整えられること。

エ 自分たちとは異なる人種を科学的な見地から他者として対象化することで、近代における自己の確立を促すこと。

オ 科学の発展に寄与する調査であるとの名目で、奴隷制が擁護されたり植民地政策が推進されたりすること。

III

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

コンピュータや計算機はおろか、活版印刷術や製紙法が発明されるはるか以前の古代西欧世界に、「記憶術(羅: *ars memorativa / ars memoriae*)」と呼ばれる摩訶不思議な技巧が存在した。いや、その時代にあつては不思議でもなんでもなく、文字通り、人が生まれつきもっている記憶能力を人工的に強化するための貴重なテクニックの謂(い)だった。その当時は、世界の成り立ちを説明する神話や先祖伝来の慣習、あるいは社会の秩序を維持する細かな法文などを後世に伝えるには、おおかた口伝に頼っていたと考えられている。ひょっとしたらまだ書記法や文法体系すらあやふやだったかもしれないそんな文明の黎明期に、大切な情報を大量かつ堅固に保持する最良の方途といえば、人の記憶にデータを刻み込むことだったはずだ。ギリシア神話の世界で、記憶をつかさどる女神ムネモシユネがオリュンポスの神々の一柱として崇(あが)められていたことも、当時の人々の記憶観をよく伝えているだろう。

心を震わす韻律にのせ、身体でリズムを刻みながら、古代世界のプロトコルともいえる長大な神話や叙事詩を滔(とう)々と紡(紡)ぎだす「語り部」や吟遊詩人たち。そんなムネモシユネの寵児(ちゆうじ)たちが有していた特殊な記憶と想起の技巧は、やがて文明の進展とともに術としての体裁をととのえ、その方法論が洗練されてゆくだろう。そうして記憶術は、一般の人々にもなじみのディスプレインとして歴史の表舞台に登場してくる。史料で確認できるところでは、古代ギリシア時代にはすでにその原型とおぼしきものが存在していたようだ。やがて古代ローマ時代になると一挙に発展の速度を早め、いわゆる古典的記憶術の基本が完成するに至る。その背景をざっと概観してみよう。

共和制ローマが宿敵カルタゴを屠(ほ)り、地中海世界に覇権を確立すると、拡張と戦争の時代は一応の終結をみた。政情が安定して文化が成熟するとともにリテラシーが上昇し、高度なコミュニケーション・ツールとしての弁論術が人々に広く認知されるようになる。また、書物の生産や消費の量も増大し、一種の情報爆発が起こった。まさにその時代、古代ローマ最高の弁士キケロ(前一〇六―四三年)は、その著作のなかで「Aドクトゥス・オラートルBというC美しい理念をD謳(うた)いあげる。百科万般に通じ、人倫や経綸、宇宙の天理から神統譜や古今の芸文にいたるまで、およそ人知のおよぶかぎりの世事万象のいっさいを雄弁に論じつくす能力をそなえた弁論家こそが、自由人の理想と仰がれたのである。その者は弁論一つで民衆を歓喜させ、国家の危機を救って、文化を振興させるだろう。

1、どんなに優れた長広舌も、手元の原稿に目を落とし、書かれた章句を棒読みしながらとあつては、いささか迫力に欠け、説得力も期待できない。長大な演説を流れるように、かつあたかも即興で話しているかのように実演できたら理想的だろう。このような事情から、記憶を人工的に強化する諸規則、すなわち記憶術は当時の弁論家が備えるべき必須の技術の一つとなり、弁論術(修辞学)教育のカリキュラムのなかで組織的に伝授が可能な、ひとつの確立したディスプレイン

として発展していったのだ。

ここで、その弁論術という学問の成り立ちを少し詳しく見てみよう。古代ローマ時代に基礎が確立された西欧の伝統的な弁論術は、次の五つの分野で構成されていた。すなわち、①「発想(inventio)」（弁論の主題にふさわしいトピックを、あらかじめストックしてある情報群の中から探し出すこと）、②「配置(dispositio)」（①で得られた内容を、適切な順序で配列・展開させること）、③「修辞(elocutio)」（狭義のレトリック、すなわち主題を効果的に提示する言語表現をあれこれと工夫すること）、④「記憶(memoria)」（弁論内容を記憶すること）、⑤「発表(pronuntiatio / actio)」（弁論の実演の際に発声や身振りを工夫すること）。これらのうち、今日いわゆる修辭学（レトリック）として理解されているのは、③の「修辭」の部分である。けれども、弁論術は本来五つの分野すべてがそろった総合的な学問としてこそ、古代世界で高い地位を有していたのだ。^Bその点は忘れてはならないであろう。

さて、記憶術が属していたのは当然、④の「記憶」のパートである。先ほども触れたように、議会演説や法廷弁論の場で熱弁をふるい、自己の主張を述べた際、流麗なパフォーマンスを演じるのが理想とされていた。演説の出来栄が、時には人生の浮沈を左右することさえあったのだ。

2、立身出世を望む者は、みなこの記憶術をマスターし、何時間にもおよぶ名演説をぶつて、聴衆を魅了したのである。偉大な弁論家キケロやクインティリアヌス（三五頃―一〇〇年頃）は当然のこと、一説にはあのカエサル（前一〇〇―四四年）もこの術を実践していたという。ローマ時代にはそれこそ無数の教科書やマニュアルの類がパピルス紙に書かれて出回っていたようだが、残念ながら完全なかたちで残っているものはこれまで発見されていない。けれども、キケロ『弁論家について』や作者不詳（偽キケロ）『ヘレンニウスに与える修辭学書』、クインティリアヌス『弁論家の教育』など、同時代の代表的な弁論術の理論書で間接的に触れられている情報をもとに、おおよその姿を復元することは可能である。

^Cまずは記憶術の誕生をめぐる有名な挿話を紹介してみよう。キケロが生き生きと伝えるエピソードである。物語の主人公は、イオニア海のケオース島出身の抒情詩人シモーニデース（前五五六頃―四六八年頃）。史上初めて、詩作によって褒賞を得た職業詩人として伝えられる人物だ。ある時、詩人のパトロンの一人であるテッサリアの豪商貴族スコパースが、戦車競技での勝利を祝して饗宴を開いた。当時の宴会といえば、会食者たちが長椅子に寝そべり、横臥姿勢のまま飲食と会話を楽しむスタイルだ。

さて、宴もたけなわの頃、何か戦勝祝賀の歌でもうたってくれんか、という主人からのリクエストを受けたシモーニデースは、かしこまって候とばかりにさっそく吟唱をはじめた。詩人の常として、己の詩句を飾り立てるために、主テーマから少しばかり脱線し、双子神カストルとポルクスを称える美辞をちりばめたものだったという。けれども、これが饗宴主の機嫌を損ねた。聞いてい

るうちにみるみる不機嫌になったスコパースは、いかにも狭量といおうか、いざ報酬を支払う段になると、約束していた金額の半分しか渡さなかった。残りはお前さんがたっぷり称えた双子神からもらうがいいさ、そういい残すとスコパースは再び飲み食いの座に戻っていつてしまった。とまどいと恥辱に呆然と立ちつくす詩人。

と、そこへ侍従が小走りに近寄ってきて、シモーニデース様、あなたに至急お話があるという客人が二名、玄関口でお待ちです——はて誰だろう、心当たりはなかったものの、一応玄関のところまで出てみた。

3、それらしい人物の姿など、どこにも見当たらない。何かの間違いだろう、と思い直して再び邸内に戻ろうとした、その瞬間！……轟音とともに天井が崩れ、宴会が開かれていた邸宅は一瞬にして瓦礫がれきの山になってしまった。当時の貴紳の大邸宅は石造が主体だっただろうから、重たい屋根や壁の量塊が崩れ落ちてきたら、ほぼ即死である。シモーニデースは、誰とも知れぬ客人の呼び出しのおかげで、間一髪、災難を逃れたわけである。言わずがなではあるが、詩人を救ったのは双子神カストルとポルックスの化身であろう。自分たちを称えてくれた人間に、命という報酬を与えたのだ。

さて、困ったのは宴会参加者たちの遺族である。瓦礫を取り除けてみたのはいいものの、遺体の損傷が激しく、誰が誰だか分からない。ところが、ただ一人生き残ったシモーニデースが、どこそこに座っていたのは誰、そこにいたのは何某、といった具合に次々と身元の確認をやったのけた。

なぜそんなことが可能だったかという点、宴会場で、どの座席を誰が占めていたのかという固定した組み合わせ、つまり場所（席次）と情報（人物像）をセットで視覚的に覚えていたからだということかもしれない。これがもし人々が自由に動き回る立食パーティだったら、こうはうまくいかなかっただろう。ここから分かるのが、効率的な記憶や想起には、Xが大事である、ということだ。以降シモーニデースはこの原理を活用して、記憶の達人としても名をはせたという。

以上が記憶術の誕生秘話として伝えられるエピソードである。事の真偽は確かめようもないが、たとえ創作譚だったとしても、この話には実に興味深い点がいくつも織り込まれている。

Xの、いわゆる記憶術三原則以外にも、たとえばイメージの強度（鮮烈さ）の問題があるし、そもそもこの挿話の主人公がシモーニデースである点が、何よりも示唆に富んでいるのだ。シモーニデースといえば、彼の言葉としてプルタルコス（四六／四八頃—一二七年頃）が伝える「絵は言葉を使わぬ詩、詩は言葉で描く絵である」というフレーズが、よく知られている。のちにホラティウス（前六五—前八年）が「詩は絵のごとくに（ut pictura poesis）」なる文言に集約することになる、いわゆるエクフラシスという修辞表現／技巧の核心をつく言葉だ。

D「エクフラシス（ekphrasis）」はギリシア語の前置詞“ek”（……から外へ）と動詞“phrazein”（明らかにする、宣言する、発話する）という語から構成され、その原義は「はつきり述べる」という意味である。もともと、古代の弁論術（修辞学）教育の基礎課程（Progymnasmata）の一つとし

て位置づけられ、主題を眼前に生き生きと描き出す言論のことだった。要するに、あたかも目の前にイメージがありありと浮かんでくるような、そんな迫真性に富んだ文章を書くための訓練およびそうして出来上がった文章こそが、本来エクフラシスと呼ばれていたのだ。

しかも、特別な才能にめぐまれた文章の達人が使いこなす技巧ではなく、むしろ入門教程の中で誰もが学ぶ基礎事項だったという点が重要だ。したがって、将来の応用を見込んだその描写訓練の対象は、人物や事件や出来事、気象、都市、ランドスケープ、戦争、時間経過などなど、あらゆるトピックや現象にひろがっていた。なにも美術作品の描写のみが、特別視されていたわけではないのだ。やがてエクフラシスという概念が独り歩きをはじめ、とりわけ近代以降には、視覚芸術を言語によって詳細かつ鮮烈に表象すること、という意味合いが強くなる。つまり、絵画や彫刻や建築を生き生きと描写する文章をエクフラシスの原義とみなす考えは、実はごく新しいものということだ。

ともあれ、ここで主眼となるのは、テキストとイメージの通底^Eである。言葉の力を駆使し、読む者の心の内にみるみると、鮮烈なイメージをまるで画家のように描き去る。それも単なる静止画風の心象映像にとどまらず、描かれた対象の躍動感、息遣い、匂いや色や触感や温感までをもともなうで、まるで自分がその場で当の現象を実体験しているかのような錯覚を起こさせる——そんな動的な文章を紡ぎ出す技巧。エクフラシスの描写がその力を十全に発揮するとき、読者の側には、心拍数の上昇や、恍惚感、あるいは冷や汗や鳥肌など、生理的な反応まで引き起こされる。こうした生理現象をともなう心理的效果のことを「エナルゲイア (enargeia)」¹といい、エクフラシスはまさにそういった情動的效果を指すべきだとされた。一方、テキストとイメージの親密な関係性を絵画の側から見てみるなら、詩歌が何百行もかけて縷々^る描破する情景を、一枚の絵の中に封じ込める技法——それも単なる静的な描写ではなく、その鮮烈で躍動感あふれる表象像が、観者の心のなかに強烈に刻印され、やがて生き生きと動き出して、あたかもテキストが語るような一定の時間の厚みをもった物語が発動する、そんな境地だ。

詩（テキスト）の側から迫るにせよ、絵（イメージ）の側からアプローチするにせよ、問題は要するにメンタル・イメージ、すなわち精神の中に描かれる映像を、いかに臨場感をもって作り出すか、ということである。詩と絵画という二つのメディアの通底を誇らしげに謳^{うた}ったシモーニデースは、おそらくそのような画文一致の境地が生み出す驚くべき認識効果を自覚的に取り入れて詩作を行い、テキストとイメージのあわいを自在に往還することができたのだろう。こうしてみると、精神内のイメージ操作に立脚する記憶術が、まさに彼によって発見された（と見なされていた）という点こそ、同術の発展を考える上でも、非常に大きな意味合いをもっているのである。

（桑木野幸司『記憶術全史 ムネモシユネの饗宴』）

問一 空欄

1

3

に入る最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | |
|---------|---------|----------|
| 1 ア または | 2 ア それに | 3 ア そもそも |
| イ さらに | イ しかし | イ ところが |
| ウ ゆえに | ウ だから | ウ おまけに |
| エ ただし | エ もつとも | エ そのうえ |

問二 傍線部A「学識ドクトゥス・オーラートルある弁論家」とあるが、

弁論家を取り巻く当時の状況について述べた次の

ア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 人間についてのみならず、技芸、文学、神から宇宙にいたるまで語りつくすことが理想とされた。

イ 原稿に書かれた章句を詰まることなく朗々と読み上げて、聴衆の感情を盛り上げる技術が重要だった。

ウ 高度な伝達技法が取り沙汰される背景には、共和制ローマによる平和な時代の到来があった。

エ 書物の生産と消費が急激に進み、ある種の情報化社会が現出する中で、優れた弁論家の需要が高まった。

オ 当時の弁論家育成課程には、事物を記憶する力を人為的に引き上げる方法が取り入れられていた。

問三

傍線部B「その点は忘れてはならないであろう」とあるが、ここで筆者が注意を促す理由として、最も適切なものを次のア～オのうちから選びなさい。

ア 弁論術は、五つの要素がそろってはじめて「総合的学問」と認められていたため。

イ 弁論術は「記憶」が重要であったにもかかわらず、それが見過ごされる傾向があるため。

ウ 現代でこそ注目される弁論術も古代では軽んじられていたという憶測があるため。

エ 今日、弁論術といえば言語表現に工夫を凝らす方法という印象が強いため。

オ 古代ローマ時代から中世に移って以降、弁論術の伝統が衰退した事実があったため。

問四 傍線部C「記憶術の誕生をめぐる有名な挿話」とあるが、この挿話の内容として適切なものを、次のア～オのうちから二つ選びなさい。

ア シモーニデースに取り次ぎを願ったのは、双子神の化身であったと考えられる。

イ シモーニデースは、詩作の結果として多大な恩恵にあずかった。

ウ シモーニデースは、神への礼賛が芝居がかっていたためにスコパースの不興を買った。

エ 双子神カストルとポルックスは、神々を敬わない不遜な人間に死という罰を与えた。

オ スコパースが祝賀の歌に期待していたのは、双子神ではなく他の神々への賞賛であった。

問五 ニカ所の空欄 X に入る最も適切な語句を、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 場所と言葉とスタイル

イ 場所と言葉と秩序

ウ 言葉とイメージと吟唱

エ 吟唱とスタイルと秩序

オ 場所とイメージと秩序

問六 傍線部D「エクフラシス (ekphrasis)」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア エクフラシスは弁論術の入門教程における基礎事項であり、誰もが使いこなすことのできる普遍的な技巧であった。

イ エクフラシスの原義は「眼前にイメージが生き生きと浮かぶような迫真性」とはかわりがない別の意味であった。

ウ 現在ではもっぱら芸術作品を記述する技術とされるエクフラシスだが、かつてそれが適用される範囲は広大であった。

エ 「詩は絵のごとくに」というフレーズは、エクフラシスが詩人や画家にとってこそ重要な技術であることを伝えた。

オ エクフラシスという修辞表現と技巧は、ホラティウスへと伝わった際に実践的に整備された。

問七 傍線部E「テキストとイメージの通底」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 静的で動かない絵画であっても、そこで物語が進み続けるような時間の厚みが表現されることがある。

イ 文章に表された対象の躍動感や息遣いは、類似する実際の経験を記憶している時にこそ、強く感じることができる。

ウ 「エナルゲイア」という強い心理的な効果の発生が、テキストとイメージの親密な関係をつなぎ止める。

エ 心の内に躍動感あふれる表象像が描かれるような画文一致の境地は、記憶術という技巧に通じる点がある。

オ メンタル・イメージは、詩と絵画という二つのメディアをふまえることで、臨場感を獲得するにいたる。